

---

# 田中のこと

オオハタ ユウキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

田中のこと

### 【Nコード】

N1797H

### 【作者名】

オオハタ ユウキ

### 【あらすじ】

田中春男という男がいた。その男について語ろうと思う。

とある一人の男について書きたいと思う。なぜその男を書いたのかについては、最後まで読んでもらうとわかるはずだ。その男は、日本を、いや……世界を救ったんだから……。

名前を田中春男と言った。しかし本人はその名前を嫌い、自分のことを昴ペロンチー又と呼ばせていた。なぜその名前なのか、誰もが疑問に思ったが、田中春男は最後まで頑として理由を言うことは無かった。

年齢は三十を超えていたが、本人も自分が今何歳なのか忘れていたようで、誰も正確な年齢はわからない。脳に先天的な障害を持っており、十歳の頃両親に捨てられた。その後の壮絶な暮らし振りは、わざわざ説明しなくてもわかるだろう。この日本で、マンホールに住み残飯を漁って生きてきた。幸いなことにホームレス連中に可愛がられ、何とか生き延びることができたようだが、筆者はその時代の田中については何も知らない。本人ですら忘れているのだからそれも仕方あるまい。

「僕はね、カルファアラ神の生まれ変わりなんだよ」

煙草をゆるゆるとふかしながら言う田中は、優しげな表情をしていた。カルファアラ神とは一体何なのか、私にはわからなかった。

「カンルグ様が僕の一生を守ってくれるんだ」

田中は、自分のことを昴ペロンチー又と呼ばない人に対してとても冷たく当たっていた。暴力も厭わなかったようだ。新しい人間として生まれ変わりたかったのかもしれない。

時として、自分としてはそういうつもりはなかったものの、人を助けることがあった。一人で学校から帰っていた幼女を連れ去った時は凄まじい騒ぎになったが、その騒ぎの合間に幼女の家が火事になって全焼してしまったのだ。あのまま帰っていれば、死んでいた。

幸い家族は全員出かけており、死者はでなかったようだ。田中は町の人々に感謝され、愛されていた。こういう人間　　と言つては失礼だが　　が一人で生きていくことができるだけの土壌がそこにあったのだ。

なぜ幼女を連れ去つたのか、と私は聞いたことがある。その時の理由を聞いて、笑つてしまった。

「だって、可愛かつたから。カルファアーラの生まれ変わりなんだよ僕は」

一つの一軒家が、真昼間に突然爆発した。近隣に被害を与えない程度の爆発だったが、家は崩壊し、そこに住んでいた年寄り夫婦が死んだ。私は知っていた。この年寄り夫婦が田中を虐めていたことを。

そして次の日もまた家が爆発した。その家族も田中に関係していた。

「僕がね、お願いすれば、なんでも叶うんだよ」

私はその日、布団の中で震えた。田中に対して何かよくないことをやったんじゃないのか、と記憶を探り、死ぬかもしれない恐怖に慄いた。しかし次の日、田中とは全く関係の無い家が爆発した。

「僕は知らないよ。全てカルファアーラの思し召しなんだから」

私だけでない、街の人々はあからさまに田中を避けるようになった。田中が家を爆発させるなんてできるわけが無いと思うのが普通だが、誰かを犯人にしたかつたのだ。この街は小さい。住人の誰もが知り合いだ。その中で疑いあうのはよくないことだ。そこで田中が犠牲になった。

街の人が田中を避けるようになってから、爆発件数が飛躍的に増加した。家だけでなく、野良犬や野良猫といった動物も原因不明の爆発で死んでいった。警察の発表によると、爆弾のようなものは見つからなかったようだ。突然爆発した。それだけしかわからなかった。

「爆発はみんなにとっていいことなんだ。マイナスに考える人がいるけど、それは違う」

みなが避けるようになっても、私は毎日田中の元へ訪れていた。監視するという意味合いもあるが、田中に嫌われたら殺されるといふ思いのほうが強かった。

私はその日、いつものように田中の後をついてまわっていた。田中には気づかれないように細心の注意を払いながら。

「未成年が煙草なんか吸っちゃ、いけないよ」

田中が、道端に座り込む高校生の集団に近づきながら言った。高校生はこの街の人間ではないのだろうか、田中のことは知らないようだ。田中の汚い身なりを笑いあい、リーダー各の男が田中の前に立った。

「何だよおっさん」

「未成年が煙草なんか吸っちゃ、いけないよ」

「こいつ頭イカれてんぜ！」

リーダー各が振り向き、集団に笑いかける。それに合わせるように集団も下品に笑った。

私はそれを電柱の影に隠れながら見ていた。助けようなどとは思わなかった。田中がやったという証拠が欲しかった。あわよくばここで殺されてくれれば、夜に一人で怯えることも無い。固唾を飲みながら一部始終を見る。

「おっさん、文句あつかよ」

リーダー格が、これ見よがしに田中に煙を吐きかけた。苦しそうな表情でそれを払いのける田中に、また大声で笑った。

「このおっさん、障害者なんだよ」

座り込んでいた集団の一人が立ち上がりながら言った。髪の毛を茶色に染め、制服をだらしなく着ている。私はその少年を知っている。同じ街に住む少年だ。両親が厳しいのか、街では優等生を演じているが、まさかこんな裏の顔があったとは……。私はこのことを誰かに言いたくなる衝動に駆られたが、ぐっと堪えて一部始終を見

届ける。

「キチガイかよ！」

「でも、ちよつとした噂があつてさ」と茶髪の少年が言った時には、リーダー格の男は田中を殴り飛ばしていた。小さく悲鳴を上げて後ろに吹き飛ぶ田中を、また大声で笑つた。

「キチガイを心配する奴なんざいねえだろ。やっちまおうぜ」

茶髪の少年以外がそれに賛同し、うづくまる田中を次々に殴りつけてゆく。恐怖に怯える茶髪の少年が「お、俺は知らない」と呟きながらどこかへ走り去つて行つた。そんなことはお構いなしに田中を殴りつけるリーダー格の男の首から上が吹き飛んだ。少年たちは自分に突然降りかかった肉片をわけもわからず振り払つ。ゆつくりと田中が立ち上がり、首から下だけになつたリーダー格が倒れこむのをただ無表情で眺めている。

「なんだよこれ！」と叫んだ少年の右手が吹き飛んだ。苦痛に歪む顔が、握りこぶしを開くようにしてぱつくりと開いた。逃げようとする少年の足が吹き飛び、地面に倒れこんですぐに、ぱんという小さな音を立てて全身が吹き飛んだ。腰を抜かし涙を浮かべ小便を垂れ流す少年の頭が吹き飛んだ。全員死亡した。私はそこから立ち去ることもできず、震えながらそれを見ていた。全身が恐怖という文字に支配され、口の中が乾く。いつの間にか少年と同じように小便を垂らしていた。

田中が私を見た。全身の毛穴が開き、私は動かない足を無理やり前に出し、一目散でそこから逃げ出した。次の日、それは大きなニュースになった。しかし私は部屋から出ることもせず、ただ布団の中で怯えていた。次は私が殺される、少年たちと同じように爆発させられる、と。昼過ぎ、部屋のチャイムが一度だけ鳴つた。当然私は居留守を使おうと、固唾を飲んで布団の中で震えていた。扉が小さな音を立てて爆発した。

「僕と君は親友だよ」

私の前で微笑みながら座る田中に目を合わせることが出来ず、私はただ震えていた。

「この世には悪が多すぎる」

「私は違う！」

思わず私は叫んでいた。一瞬びっくりした表情になるが、また微笑を浮かべた。

「わかってる。僕は、悪い人が憎いんだ」

吹き飛んだ扉の向こうから、小さな爆発音が聞こえた。

「あの人はね、自分の子供を虐待してたんだ」

また、爆発音。

「あの人はね、年寄りを騙してお金を得てたんだ」

次も、破裂音。

「あの人はね、僕を虐めたんだ」

そして、部屋に置いてあるテレビが小さく破裂した。

「君はね、僕を助けなかった」

私は泣きながら土下座をし、謝罪の言葉を繰り返した。死にたくない、死にたくない、許してください、お願いします。

「大丈夫。誰だって怖いから。でも、カンルグ様の導きにより、楽園に行くことができるんだ」

田中の言葉など耳に入らなかった。ただ私は謝罪を繰り返していた。

「楽園に行きたくないかい？」

「お前だって人を殺しまくっただろうが！」

私は思わず叫んでいた。鼻水や唾が勢い良く田中にかかった。田中は顔一つ変えず、私をじっと見ている。

「わかってる。だから」

田中の頭が音も鳴く破裂した。私は田中の亡骸を抱きかかえながら、ただただ泣いていた。

終

(後書き)

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1797h/>

---

田中のこと

2010年10月8日14時30分発行